

平成 24 年 7 月 22～29 日まで爽やかな晴天の下、スタンフォード大学で開催された海外研修会に参加した。第 7 期生は、北は北海道、南は長崎から精鋭が集まり、研修生の研究等への意識の高さに驚くとともに、筆者のモチベーションの維持にも繋がった。以下に、本研修内で議論したテーマに関して筆者が感じたことを記す。

1. 日本放射線技術学会の国際化と学術大会の今後の在り方について

話題提供のために、筆者は専門である核医学領域と、病院内の立場で診療放射線技師と境遇が似ている薬学領域の現状を報告した。核医学領域では、一部国際化が始まっているが、ほとんどの学会では国際化の動きがあまりなく、日本語での発表が中心であった。薬学領域では、当学会と同様な役割を果たす日本薬学会において国際化の動きは見られなかったが、より専門的な日本薬物動態学会等では、既に英語の発表が中心になりつつあった。つまり、様々な学会において国際化の必要性を認識してはいるが、国際化がそれほど進んでいる状況ではなかった。筆者は当初、国際化に反対であったが、議論後には、当学会が他の国内学会に先駆けて、国際化を少しずつ始めることは、将来的なことを考えて必要かもしれないと思った。なぜなら、国際化を目指すことで、技術的な研究の発展が期待できるだけでなく、例えば放射線技術があまり浸透していない東南アジアからの技師の研修生の受け入れや、海外での講習会の開催なども増えることで、技師の国政への躍進、病院内での立場の向上や、アジアを先導するリーダーの育成に繋がると思ったからである。しかし、当学会は、研究レベルを向上させると同時に、学会員への技術的知識の普及も行う役割があるため、英語を敬遠して、学会に参加しない学会員が増えることは問題である。そこで、日本語での教育講座をより充実させることや、英語で口頭発表を行う学会員にメリットのある対策を講じるという意見が議論中に出て、筆者はその意見に賛同した。

2. 研修会で得たことを今後どのように活かすか。

本研修で知り得た多くの中で、特に 2 つ印象に残った。1 つは、一流研究者のプレゼンテーション能力、2 つ目は、画像領域に限らない研究の推進である。1 つ目のプレゼンテーション能力とは、可能な限り文字を使わず、画像や図を使用し、強調するところは、声を大きくし、ポーズもいれ、聴衆が飽きてきたときには、必ずユーモアを取り入れることで、専門外の人も魅了する能力である。その重要性に本研修で改めて気付かされた。夕食中に筆者と同様な研究を行っている Shuhendler 博士に話を聞いたところ、アメリカでは、大学等でその能力を身に付けるための授業があり、そこでトレーニングを受けるようだ。これは日本の大学でも取り入れるべきだと思った。2 つ目は、スタンフォード大学放射線科のトップである Gambhir 博士が目指している癌の超早期発見とオーダーメイド医療に関する研究内容についてである。現在の医療では、遺伝子研究が盛んに行われているため、この遺伝子情報と画像情報をうまく組み合わせることで、生検を行わずとも画像を用いて被検者ごとの癌の遺伝子情報の取得を目指している。放射線科にも関わらず、最終的には画像を用いない癌の超早期発見の手法を確立しようとしている。当学会でも、世界最先端の研究に追い付いて行くためには、画像領域以外の技術を研究に組み合わせることや、更に言うとも画像にとらわれない新たな研究領域を構築する必要性もあるように感じた。

本研修中に、イチローが約 11 年間在籍したマリナーズからヤンキースに電撃移籍した。これまでの考え方や、やり方を変えて、新しいチームやファンに自分の存在をアピールすることはどんなに大変なのかと思う。しかし、その大変さを理解した上で、私を含め当学会員も彼のように従来の考え方を改めて、行動を起こす時期なのかもしれない。国際化に必要な英語力やプレゼンテーション能力をどのようにすれば身に付けられるのか、世界が注目する研究を行うため、新しい研究領域をどのようにすれば構築できるのかなど全学会員で考える必要があるように思った。

最後に、研修会を主催している当学会の役員の皆様、スタンフォード大学ならびに GEHC-J のスタッフの方々には、このような貴重な機会を設けていただきまして大変感謝しております。今後も、当学会員の研究意識の向上と、学会の発展のために、本研修会を是非継続していただきたいと願っております。



筆者(中央)とお世話になったスタッフの方々